

【技術分類】 1－4－2－1 織物／パイル織／木綿／輪あり

【技術名称】 1－4－2－1－1 タオル地

【技術内容】

綿糸または化繊糸のパイル（輪奈）で表面をおおわれた織物をタオル地と呼ぶ。吸湿性を高めるため、パイル糸には地糸より柔らかくて撚りの甘い糸を用いる。織り方は、まず、地経糸とパイル経糸を別ビームにかけ、パイル経糸の製織張力を地経糸に比べて弱くした状態で緯地糸を箒打ちしてパイルを作る。通常は地経糸の2.5～3倍の長さのパイル経糸を用いる。タオル地の断面図を図1に示す。

タオル地には、パイルが両面に現れた両面タオルとパイルが片面にだけ現れた片面タオルがある。また、あらかじめ漂白したり染色した糸を用いて作ったタオルを先晒タオル、織り上げてから漂白したり後染めしたりして作ったタオルを後晒タオルと呼ぶ。

【図】

図1 タオル地断面図（片面3本緯タオル）

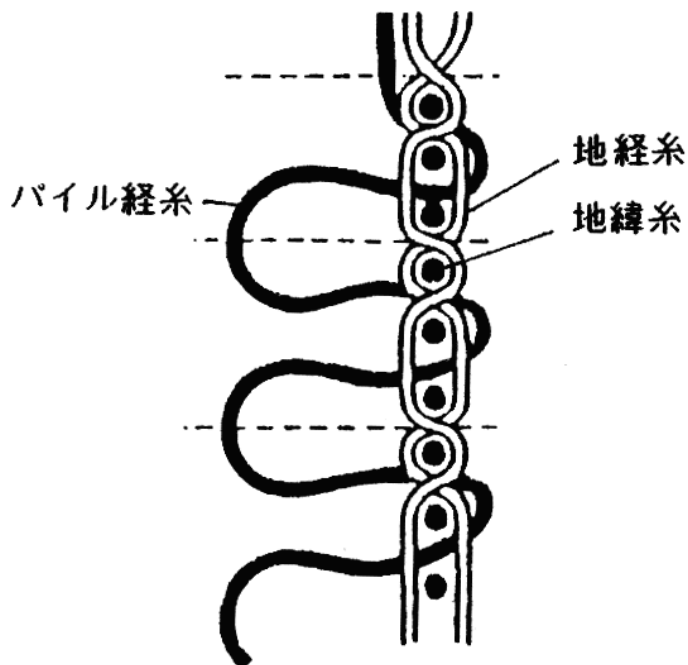


図2 タオル断面図(片面3本よこタオル)

出典：「やさしい科学 絹の知識百科」、1991年6月15日、川口浩著、染織と生活社発行、170頁
図2 タオル断面図（片面3本よこタオル）

【出典／参考資料】

「やさしい科学 絹の知識百科」、1991年6月15日、川口浩著、染織と生活社発行

「やさしい織物の解説」、1979年12月10日、寺田商太郎著、株式会社繊維研究社発行

【技術分類】 1－4－2－2 織物／パイル織／木綿／輪なし

【技術名称】 1－4－2－2－1 別珍

【技術内容】

別珍は綿糸のパイルで表面をおおわれた綿織物である。ビロードの類似品として用いられる。保温性にすぐれ、特殊な光沢を持つ。

地の経糸に、緯地糸とパイル緯糸を打ち込んで作る。緯地糸と緯地糸の間に、2～5本のパイル緯糸を入れる。緯糸でパイルを作ることから、これをビロードのように経糸でパイルを作る織り方と区別して緯パイル織と呼ぶ。織り上がった後、苛性ソーダの薄い液に通してやわらかくし、水洗乾燥させて、張台（毛切台）に張る。鋭利なナイフで、図1に示すように、パイルを切る。毛切りした布は、ガス焼きして精練漂白する。最後にこれを染色し、ツヤ出しをして仕上げる。

切られたパイルの間に地経糸が1本しかないものを、ルーズパイル、3本あるものをファストパイルと呼ぶ。

【図】

図1 別珍断面図

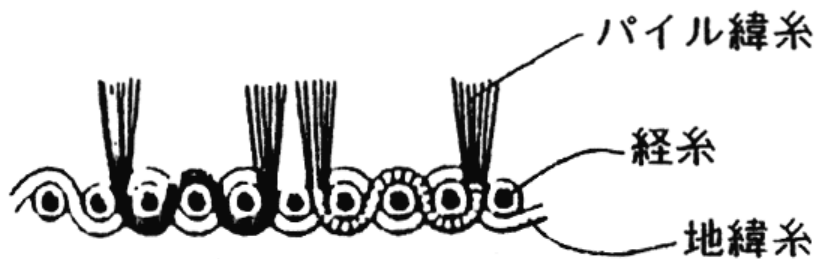


図3 ベっちゃん断面図
(平地ファーストパイル)

出典：「やさしい科学 絹の知識百科」、1991年6月15日、川口浩著、染織と生活社発行、170頁
図3 ベっちゃん断面図（平地ファーストパイル）

【出典／参考資料】

「やさしい科学 絹の知識百科」、1991年6月15日、川口浩著、染織と生活社発行

「やさしい織物の解説」、1979年12月10日、寺田商太郎著、株式会社繊維研究社発行

【技術分類】 1－4－2－2 織物／パイル織／木綿／輪なし

【技術名称】 1－4－2－2－2 緞通（堺緞通、赤穂緞通、鍋島緞通）

【技術内容】

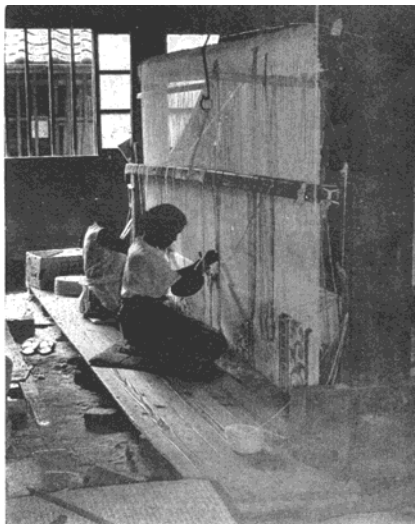
緞通は綿糸、毛糸、麻糸を使って織るパイル織の床用織物のことである。地経糸、地緯糸、パイル糸で織られる。パイル糸は先染めの色糸を用いる。

製造工程は以下の通り。1)地経糸にパイル糸をからませ、その端をそろえてハサミで切る。2)一段終わるとパイル糸を箆で締める。3)織り上げられた布は、ブラシをかけ、刃の長いハサミを使って毛足をそろえる。4)裏面に糊付けして仕上げる。

日本には中国の緞通をまねて作ったことに起源を持つ鍋島緞通、鍋島緞通を模して作った堺緞通、赤穂緞通があり、いずれも綿敷物だが、堺緞通は現在ではパイル糸に毛を使ったものが大半となっている。製織は、堺は縦機（図1）で、赤穂は高機（図2）で行われる。

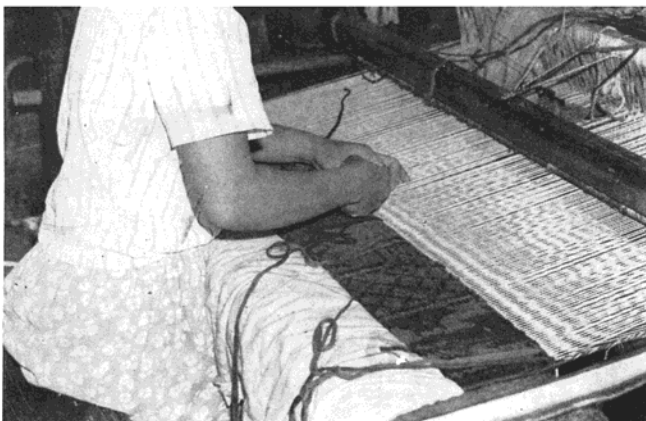
【図】

図1 堺緞通の製織



出典：「日本の伝統織物」、1967年2月28日、富山弘基、大野力著、徳間書店発行、199頁 織場

図3 赤穂緞通の製織



出典：「日本の伝統織物」、1967年2月28日、富山弘基、大野力著、徳間書店発行、205頁 “糸をはせる”作業

【出典／参考資料】

「日本の伝統織物」、1967 年 2 月 28 日、富山弘基、大野力著、徳間書店発行

「やさしい織物の解説」、1979 年 12 月 10 日、寺田商太郎著、株式会社繊維研究社発行